

己の作圖に成るもの頗る多く、稿を明治十六年に起こし、爾後約一年を費して成せるものにして、其圖は山水人物花鳥の三種を収めれば、藍本として甚有益のものなり。

翁が明香館書齋及び花鳥畫譜の著は、一面に於て我國の木版色摺を發達せしめたる功大なるものにして、後日翁の義弟たる高橋健三氏が岡倉覺三氏と共に、美術雜誌「國華」の發行を創め、精巧無比なる木版色摺を世に出すに至りたること、如きも、其實翁が之が前驅として木版を獎勵せる餘澤なりと云ふも決して不可なきなり。

翁人となり温良恭謙濫りに人争ふことなく、居常衣を正ふて端座す、家人と雖、其情容ありしを見しことなし、故に人を叱責すること少かりしにも拘はらず、家人門弟皆爾然として容を改めて翁を畏敬せざるはなかりき、翁亦性酒を嗜まず且つ三食の外食餌を口にすること稀なり、消閑の遊戯として弄ひしは、唯圍碁あるのみ、平素心を遊事に留めず、營々として身を畫事に委ね、一日と雖筆を手にせずと云ふことなく、日中は絹素に從ひ夜半人定まるに及びて圖案を經營す、故を以て日天に中して漸く起き出づること屢々なりき。

晩年に至りて翁益世事に遠かり、新聞紙の如きも之を手にすることなく、人に語りて曰はく、我は明治の畫家にあらずと、或人嘗て翁に問ふに當今畫家の西洋畫風を折衷するの可否如何を以てす翁答へて曰く、若し畫家にして己を正しくし、自然を觀照するに意を用ゐること切ならば、何を必しも洋の東西を論せむ、折衷の可否の如きは予の知る所にあらずと。

翁が流俗を厭ふこと眞に古君子の風ありしと云ふべし、劍客小暮房雄は上野國の人、明治の初年東京に在りて劍道を修業し、一日翁を其達磨横町の家に訪ひしに、翁一見して其誠懇にして賦質愛すべきものあるを認め、爾後之と交はること親密なりき、小暮氏晩年の翁を畫を敬慕すること深く自ら努めて翁の畫を蒐集するに至りしが曾て翁の作畫を陳じて展覽會を催さむとせしことあり、事翁に聞かると及びて、翁之を拒みて曰へらく、今や自己の作畫を陳じて公衆の觀覽に供すること、滔々として世に流行すれども、これ予の欲せざる所なりと、翁の此言一は謙讓の意に基くこと明なりと雖、又竊かに世流を諷するものといふべし。小磯の別業は翁の晩年に隱退せる所なり、翁之に居ること約一年にして更に鎌倉に移り、長谷村甘繩明神の東方に一家を下して此處に閑居し、而かも尙致々として斯道に盡粹し、筆を措くこと少かりしが、遂に二豎の冒かす所となり、病むこと一歳、明治三十四年九月二十八日を以て歿せり、時に歳七十二、翁高橋氏に娶り四子あり、長男精一

氏家を繼ぎ、長女の子柘植氏に嫁し、二女邦子は門人原丹橋氏に嫁し、二男頑二氏は義弟高橋健三氏の養嗣子となる。

故芳翠氏逸事 (承前)

▲阿母さん 私日本へ歸つて来たのは二十七年で其頃君は櫻田本郷町に廣大な畫室を構へて居たが其後他へ引越して其處は櫻田俱樂部となる私君の後を承けて君が引立てた佛蘭西派の學生を引受けた、間もなく戦争になる、君が從軍する、旅順口陥落の頃になつて私も戰場へ往く事となり新聞記者の宿舎と一緒に居たが其時の山本君は「阿母さん」と云ふ紳事で從軍記者仲間になつた評判なものであつた、何故「阿母さん」と云ふかと云ふに君は色んな藝に達して居る中、殊に料理が非常に巧みだ、所が當時の戦争は今回は違ひ始めての外國との戦争で糧食が非常に不自由だ、威海衛總攻撃の前に橋頭堡出發の際などは糧食は勝手にせよとの命令で一同大いに困つた、すると山本君は平生の技術を振つて饅頭粉で饅頭の汁を作り實に旨い御馳走をした爲めに大喝采、つまらぬ材料で旨く料理を拵へる、旨い料理で御馳走をするので「阿母さん」と云ふたが此人は死んだ、君の料理に旨かつた他の一つの例がある、君の佛蘭西に居た時一人の妾を使つて居たが君は器用に日本料理を拵へて好く客を呼ぶ、君の畫室は殆んど其當時の日本の貴顕紳士で外國に來た人の集會所と云つた有様がある、夫れで其の妾さん何何時か君の日本料理を覺えて了つて飯や、刺身何でも出来るやうになつたなど云ふ話もある、此外君の多藝な事は驚くべきものであつた。(黒田清輝談 日本)

▲愉快なる航海 明治十一年佛蘭西に於て萬國博覽會の開かれし際岸田吟香氏等の盡力にて彼地へ繪畫研究に赴く事となりしが此時の同船者には歐島佛蘭西公使、松方伯爵等首め六十餘名もあり、船中にて徒然を感じたる際には何時も君が引き出だされて講談、落語、義太夫など口になかせて喋りつたに何を演らせても素人離れのたが立派な藝なれば喝采湧くが如く君が爲めに船に弱いものまでが眩暈を忘れ何れも愉快なる航海を續けたらんと云ふ

▲日本畫を擧げたる 佛蘭西に到りてはクラシック派の泰斗ゼローム氏の門に入りて研究を重ねつゝ各所の博覽會、展覽會等に製作品を出して賞牌を受くるを例とししが其間また西洋繪具にて日本畫を描き大いに日本趣味の鼓吹に努めたり、某ホテルに宿泊中の事なりと云ふが借りたる室の硝子窓頗る大きかりしほどに主人に向つて「この窓へ畫をかかさないか」と相談せしに氏の技術を侮りて「この窓へ一言に拒絶したり、されど再三主人に對ひ奇麗に描くから是非と書かしてくれ」と迫りて止まざるに主人の方でも持てあまし「では書かしてあげるから、此の家を出る時には窓の硝子を新しく取替へることにして古いのは持つて行つて下さるか」宜しい承知だと約束せまり日本風の花鳥草花などを西洋繪具の許すかぎり美しく描き始めたに、ソツと覗きに來りし主人は其見事なるに魂を奪はれ「これは成程奇麗だ、何卒移轉の節には此繪だけは其儘に」と打つて變りて嘆願を氏に心の裡に可笑しくもあり故意と「初めの約束だから持つて行く」と拒絶したりしが再三再四泣くやうに頼まれて遂に之を許したるに主人は太く喜びたりと云ふ。(萬朝報)

▲氏が初めて郷里を出て江戸に上つた時は十何歳の少年で加之に學資として一文も持たない、それで講義師、落語家、旅屋にまで成下つて苦學をしたが才機縱横何をやつても頗る巧であつた、一度本職の講義師と共に寄席の高座へ現はれ得意の快辯を振つて聴衆を感嘆させた所が爲に後から出た本職な講義師が激しく冷評を蒙つて居た溜らずに逃げ出したと云ふ事だ

▲二十年歸朝後は合田氏と共に生巧箱を開いて後進の誘掖に力め名聲甚先生最得意の時であつたが二十六年に黒田久米兩氏が歸朝せるに大に其の技術を推し自分以上だと云つて門人に勸めて悉く兩氏の門に移らされた

體操の洒々落落概ね此如しである、▲氏は又劍道に通じ兼て自身演伎を巧にし、何器用で聲は破鐘の様な此人が、女の振舞色をやるに其優しき何とも云へぬ程で時短でも朝顔でも、目前に現れるやうな感があつた、されば故園十郎など非常に氏に推服して演伎の時氏は觀覽を乞ひ機嫌な挨拶に來たと云ふ事だ

▲伊藤侯は氏が大の氣に入りて機嫌の悪い時などは必ず山本を呼べと云ひ氏と對談すれば疇昔の盛が治ると云ふ位であつた、併し之は暫間として過ぎればたゞの平生其人物を推重して居る上、一點塵埃のなく而も才氣横溢せる其談論を聴くを喜ばれたので、全く氏の談論を聴く胸の透か當時伊藤侯が氏を愛重するとは随分古い氏が歸朝當時櫻田騷動と津川の洪水のシラマを描いた時なども資力を給して充分に其技術を振はせたのだ。(新新聞)

▲佛蘭西にての芳翠氏君の佛蘭西での師匠はゼローム氏に就いて三年前に死んだ有名な畫師である、外に同時代に佛蘭西に五姓田義松と云ふがあつて、ボナパルに就いて學んだが今では横濱に引込んで居る又藤雅三と云ふ人も、十八年頃佛蘭西へ往つて極真面目に勉強し乍ら日本畫か書けるので、芳翠君に手傳つて日本風の趣味を特つた壁畫の類を佛蘭西の註文で拵らつて居つた、芳翠氏は元來非常に器用で多趣味で日本畫も巧みであつたから、金持の娘などに日本畫の教授をした事もあつた、歸朝前には佛蘭西の銀座通りにも云ふべき處へ自分一人だけの製作品を陳列して展覽會を開いたなど佛蘭西では中々有名になつて、或時などは同國の文部大臣から晩餐の招待を受けた事もあつた、棲居は丁度佛蘭西大領領官舎の前であつて随分立派な畫室であつた。

▲氏の畫風と傑作 畫風は佛蘭西で云へば、師匠ゼロームに倣つて夫から出た者だからクラシック派と云ふ可い、氏はクラシック派から出て一轉した、先づマンチック派に屬して風俗を重に畫く畫風であつた色彩は殊に力を入れたが其は餘程の才があつて形よりも其方が勝つて居る、筆致にも疎放なものに緻密な方はゼロームから出て居る疎放な方は、西班牙のウエラスキスを慕つて荒く簡單に書き顯はす留學の後半期にはシヤプランの筆意を眞似て居つた、其の緻密な點になると着物の縮緬か羽二重かなどにまで書ける事に苦心して緻密を極めて居つた。

▲氏の傑作として予の知つて居る限りでは、細谷安太郎氏の所持する婦人の半身像で之はシヤプラン流のもの、美術學校にも少女の肖像がある其外伊藤侯の肖像模寫もあるが、和蘭大家のレンブランドノ肖像である。

▲門人は澤山あるが、今日畫家を騒いで他職に就つて成功して居る人もある、畫家としては白瀧龍之助、藤島武二、湯淺一郎等之は留學中の人で東京に居る方では北蓮造、仁羽林平などがある。

▲明治繪畫史を作る場合には多くの頁を君に割く價値があるが殊に予が感心する箇條擧げると第一繪畫界の先導者である事、第二油繪を眞に外國で學んだ人である事、第三繪畫の未だ盛んなる時代から幾分か盛んになつた今日まで繪畫を導きつた事である。

▲一生實に、話先に戻つて予は、日清戦争の時君よりも先に歸つたが其後白馬會の組織には私と、久米(桂一)氏と、其他の友人が君の家に集つて相談が出来たから今日まで實際の長くなるに従つて交情も綿密になつた最もお互ひに用が多いので平生は餘り出會ふ事もなかつたが予と予には一日に一回二ヶ月に一回必ず参會したものだ君が予と予に向つて「僕は君を畫工に推薦して君に氣の毒な事をしした畫工ほど貧乏なものはないと云ふ事だ君に私に素より貧乏は覺悟して居るから何んとも思ふが之は君自身の境遇からの迷ひであつた君は幾人かの學生を養つた事はあつたが遂教員にならず従つて月給を貰つて暮した事もなく始終困難な世を渡りながら大勢の家族を維持する傍ら、自分の好む畫風を守つて居つたなどは實に賞嘆すべき事だ其以後畫稿の多いには驚いた。

▲氏の性行 君は中々の奇行がある始めて、東京へ來た時などは單衣物一枚に金が僅かしかあつた困つた時は、兵衛帯何かに繪を畫いて賣つた話もある金も相應に取れたらうが錢遣ひが綺麗だ色々な道具の好みがあつて、夫れを見ると何れでも買ひたくなると云ふ方である、君の性格は非常に無邪氣で洒落で殊に恩に感じ易い先づ子供の大きなやうなものだ、感情の強い人だから自分の世話に

なつた人には痛く恐れ入る夫れに若い中は餘程の難儀をした人だから自然と卑屈野卑になると云ふ傾きも人にはあるものだが君には少しもそんな事はなれず、殊に其度の上上にしては大變な尊敬心を持つて居つた、國民としては殊に其度の發達して居る人、自分の同宗宗族でも、天皇教を立てやうと云つて居られた。

▲多藝多能 君の多藝多能は驚くべきもので、指先きの事なら何でも出来る殊に美術品なら何でもやる繪畫に一番近い彫刻などでも小さい銅像や虎などがある、今ま畫室に遺物として残つて居る觀音は蠟細工で出来たもので君が京都で製作中私も往つて見た事があるが自分で蠟を拵らへて非常な暑い中に働いて居つた、盆載も得意で澤山ある盆石にも好みがあつて自分でも拵りて往く、自分も京都から歸りに鴨川石を土産にした事がある、夫れから不思議な好みは色色な藥を集めて製造する事だ畫室には藥瓶が澤山並んで、先達の話でも佛蘭西で臭氣止を發明し、專賣特許として特許權は友人の許にあると云ふ話であつた繪の具なども色々試みたので最近のは眞珠の花で墨を拵る試験中だ、色は非常に好いが皿の縁に付けるど滑かたなく奇のが困ると云て居た。

▲背景畫の先祖 君が佛蘭西に居る中にジュリエット、ゴーチエと云ふ女文學者の知遇を得た女史は日本好きの人で君の畫室には此人の肖像がある、佛蘭西に居る中に芳翠君が畫を書き女史が詩の様な短文を添へて出版したことがある、君の芝居の趣味も亦た澤山なもので佛蘭西に居る間も巴里でオペラの道具立てから劇場の構造其他芝居に關係の事は毎日通つて研究して、想ふに歸朝後は日本の芝居に一大改良を試むる覺悟であつたらうが、時期が早く過ぎて適しなかつた、君はまだ聲色にも日本の芝居に通じて居つた、背景を始めて畫いたのが下田歌子女史の實踐女學校遊園會の時、活人畫の背景で其後明治遊園會其他二三回も畫いた、背景改良の先驅をしたのが實に君で漸く演劇が盛んになつた今日之れから君の腕を振ふべき時であつたらうに惜い事をした、之れ丈け繪畫界に功勞ある人だから外國なら最少し政府で優遇したらうが、日本では仕方がない一生貧乏で終られた氣の毒な次第である。

▲宮中の獻納畫 芳翠氏が三十七八年後に、黒田清輝伯談(日本)の光景を寫し來り長き邊りに獻上したるは、別項記載の如くなるが後再び從軍して實寫したる庚戌屯下の夜營を市五尺豎の油畫に揮毫して獻上せしに甚く御慮に叶ひて畏れ多くも、御座所の御次室に掲げられありと洩れ承はる。

▲巴里の九年 一昨夜用間に來りし、末松男爵は居合はず人々に語つて曰く山本は僕や西園寺侯など、同時代に巴里に居つたが山本が一番永く居つたのだと實に芳翠氏は達磨の向ふを張つて、九年間留學せし事別記の如し亦以て氏の研究に熱心なりしを知るべし。

▲劇場の書割 氏は日本演劇の書割即ち背景の甚だ拙なりしを歎じ洋劇風の書割を寫さんとて巴里滞在中も、同市劇場の背景は勿論裝飾其他は實地に就て研究したるが、歸朝の後華族女學校の已卯園遊會に初て活人畫の演ぜられし際、其背景を描き後また本郷座のハムレット亡靈、明治遊園會の春日社頭、後藤の背景を描き就れ非常の喝采を博したり。

▲彫刻と落語 氏は又彫刻に巧にして、象牙其他に折々彫刻を試み人を驚かすの技術あり足尾銅山の彫刻は傑作として、美術協會に保存しあり又氏の隱藝としては落語に姓を得て能く人の頤を解きしといふ。

▲家庭の和樂 芝居三田志田町七番地の家には、夫人榮子の外長男友吉、次男三男博、長女龍子、二女文子、三女八重子等あり長男は攻玉社に長女は實踐女學校に通學家庭は常に賑やかにして樂げなりと(東京朝日新聞)